３．歴史的風致を形成する活動

（１）白河提灯まつりの歴史

①祭礼の由来

江戸時代の文献『東奥白河往昔之記』『白河風土記』等によれば、中世には、鹿嶋神社より南側に払川（はらいがわ）という川が流れており、その岸辺に神を遷座していた。永正年間（1504 ～ 21）には白河結城家（しらかわゆうきけ）から渡馬が出され、白河郡（現在の西白河郡）中より随兵に擬した人夫が出され、壮麗なる祭礼が執り行われていたが、天正年間（1573 ～ 92）の戦乱により祭礼が廃れ、神輿は神池の辺りまで渡御するのみとなっていたという。

明暦３年に本多忠義が寄進した神輿
（市指定重要文化財）

現在の提灯まつりにつながる祭礼のはじまりは、江戸時代初期の明暦年間（1655 ～ 1658）で、白河藩主本多忠義（ほんだただよし）が神輿渡御の許可を与えるとともに、神社神輿（市指定重要文化財）の寄進をした（『白河風土記』）。

明暦元年（1655）の神輿渡御の際には、城下東端の桜町（さくらまち）に建築した御旅所（おたびしょ）（御旅屋（おたびや））に鹿嶋神社の神が遷座するため、神楽による祈祷が行われた。また、各町においては、13 ～ 14歳の子供を屋台に乗せ、あわせて踊りを奉納したとされる（『東奥白河往昔之記』延宝6年（1678））。この時期には、7月6日から8日までの3日間、祭礼が行われていた。

その後、寛政6年（1794）には、祭礼日が8月3日から5日までに変更されたという（『白河風土記』）。

このように、鹿嶋神社祭礼は白河藩の庇護の下、途中に休止や祭礼日の変更はされながらも、明暦3年（1657）の渡御祭再開から約350年にわたり本市を代表する祭礼として現在に引き継がれている。

②江戸時代（明暦3年（1657）以後）の祭礼の様子

明暦3年（1657）の渡御祭復活以降の祭礼の様子は、白河藩より町方に出された祭礼の諸事に対し様々な規制を布達した記録から知ることができる。それらを総合すると、江戸時代の祭礼は以下のように執り行われていた。

Ⅰ　祭礼の節には、白河藩より御供料米（ごくりょうまい）、初穂料（はつほりょう）等をはじめ様々な支援があると同時に、本町（もとまち）脇本陣や大手門（おおてもん）前等に藩役人が詰め、祭りの監視や見回り等を実施する。

Ⅱ　1日目の夜に町人氏子町（12 ～ 13町）が桜町御旅所（さくらまちおたびしょ）に集合し、鹿嶋神社神輿を迎

えるため氏子町ごとに祭礼組織の階級に基づく隊列を編成した提灯行列を出し、深夜に神社から桜町の御旅所に神輿が遷座する。

Ⅲ　祭礼期間中は、昼間に各氏子町が山車と踊り屋台を引き出し、奥州街道を中心に練り歩く（大手門（おおてもん）前では順番に屋台芸を行う）。同時に神輿が氏子町の総町を渡御する。

Ⅳ　祭礼期間中は、夜間に総町を渡御した神輿が御旅所に帰還するが、この際氏子町ごとに提灯行列をつくって神社神輿を送迎する。

Ⅴ　最終日の夜には、各氏子町の提灯行列が神社神輿を鹿嶋神社まで送る。

「金屋町祭礼山車」（嘉永５年（1852））

「金屋町祭礼山車」（嘉永５年（1852））

江戸時代の祭礼は、以上のように神輿送迎のための夜の提灯行列、屋台・山車の奥州街道を中心とした城下運行の2つの行事が祭礼の中心となっていた。

また、明暦3年（1657）には、屋台が12～13台出て、12～13歳位の子供が華麗な衣装を着用し踊り芸を奉納していたが、家業を怠るほど芸事に夢中になるなどの傾向があったため、寛政11年（1799）には、白河藩から屋台数を3～4台まで、踊り子も3人を限度、衣装は木綿の類、家業も怠ることのないように等の祭礼改革が布達されている。藩の同心役人達が警備にあたったのは、屋台の引き回しが夜にまで及び、夜間の提灯行列の際には喧嘩や口論が起こりやすいなどの理由によるものだった。

③近代以降の祭礼の様子

近代以降の祭礼の様子は、明治11年（1878）のエドワード・シルヴェスタ・モースによる紀行文『Japan Day by Day（日本その日その日）』「函館及び東京への帰還」や明治31年（1898）9月14日付『福島民報』、昭和3年（1928）9月14日付『福島民報』の記事などから伺い知ることができる。

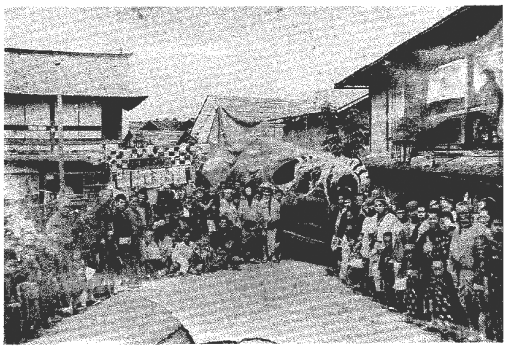
モースは、提灯行列の様子を「広い道路、両側に立並んだ低い一階建の日本家屋、軒の下の提灯の列、感心している人々で一杯な茶店、三味線や笛を奏している娘達、速歩で進む行列、高さ十五フィート（4.6m）の竿の上で上下する提灯、時々高さ三十フィートの竿についた提灯の一対」と記している。

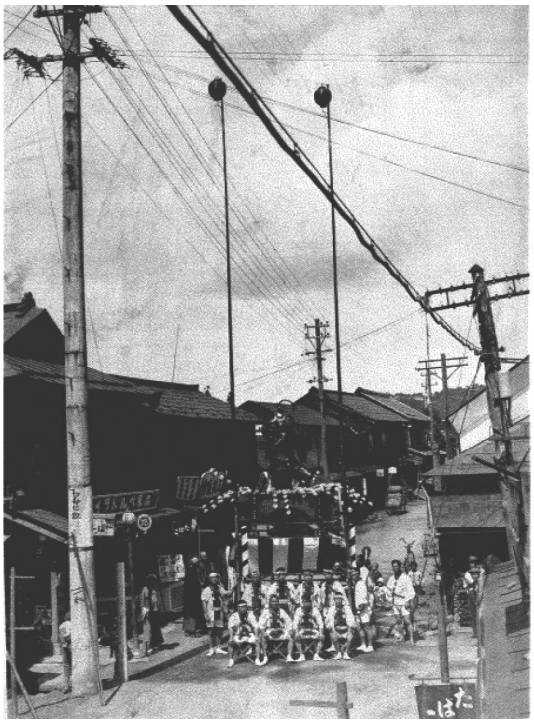
明治31年（1898）の『福島民報』では、昼の山車と屋台の各町への引き回し、屋台での芝居等の興行、屋台に続く踊り、各町の大世話、中世話、小世話、壮者（そうじゃ）等の氏子町ごとの組織による先達（せんだつ）・高張（たかはり）・元方（もとかた）・手提灯等の提灯群による夜の神社神輿の送迎について記されており、江戸時代の祭礼の形式が近代においても伝承されていたことが分かる。

白河町祭礼一覧表（明治31年（1898））

また、昭和3年（1928）の記事では、この祭礼が「儀式祭（ぎしきまつ）り」あるいは「喧嘩祭（けんかまつ）り」と別称されるほど、氏子町内における階級組織や町内対町内の祭礼時における作法が厳しく守られていることが記されている。

このように、江戸時代に起源を有する祭礼は、明治・大正・昭和・平成・令和と、それぞれの時代情勢のなかで少しずつ変化しながらも、現代へと受け継がれている。





左上：新蔵町の山車古写真（明治末頃）（『写真でみ白河のあゆみ』所収）
左下：大工町の山車と練り子（昭和中頃）（個人蔵）
右：天神町の先達提灯と山車（昭和初期）（個人蔵）

（２）白河提灯まつりの祭礼組織

①氏子町内とその変遷

現在の祭礼で提灯行列や屋台山車を出す組織である鹿嶋神社の氏子町内は、旧城下町を中心とした市街地の23町内である。祭礼は、戦前までは江戸時代以来の町人町である桜町（別名・宮本）、愛宕町（別名・先達）をはじめ、大町、天神町、中町、本町、横町、田町、金屋町、大工町、新蔵町、南町、馬町、年貢町の14町により祭礼が執行されていたが、昭和22年（1947）にこの14町に加え、登り町、昭和町、道場町、丸の内、鍛冶町、向寺の6町内がそれぞれ大町、天神町、中町、桜町、田町から独立した。さらに昭和47年（1972）には、会津町が丸の内から独立し、続いて昭和57年（1982）に旭町が桜町より独立、昭和63年（1988）に中田が桜町から独立し、現在は23町内により祭礼が執り行われている。

祭礼においては、宮本とも呼ばれる桜町が主体となる。宮本である桜町は鹿嶋神社から一番近く、神輿の休憩所となる御旅所の所在地であることから、この役割を担っている。先達とも呼ばれる愛宕町は、神輿や提灯行列の警護、また提灯行列の進行責任を行う等の役割を担う。

②祭礼組織

祭礼は23町内を基礎単位として、町内ごとに組織された祭礼を取り仕切る元方（世話人）と神輿の担ぎ手となる壮者により祭りが執行されており、いずれの組織にも階級制度がある。

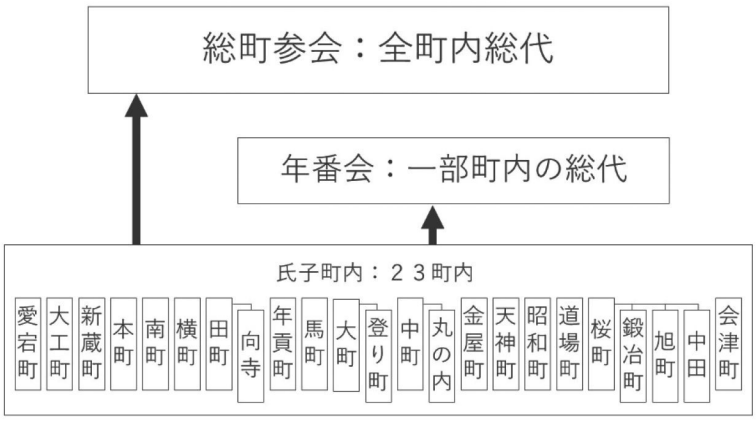
白河提灯まつりの祭礼組織を調べた松平誠によれば、「元方」は長老の集団であり、祭事行事を主宰するとともに、壮者を監督し、他町との連絡・折衝をする組織であるとしている。一方で、「壮者」は若衆であり、祭礼の準備にあたり、当日の神輿の担ぎ手となる組織である（松平誠『祭の文化　都市がつくる生活文化のかたち』有斐閣　平成13年（2001））。

元方は大世話・中世話・若世話等に、若衆による壮者は、壮長・壮者に分かれ、各町の氏子組織全体が階級組織に編成されている。また、各町には元方と壮者を取りまとめる総代がいる。

各町の総代と元方の代表者で構成される「総町参会」が、祭礼に関する意思決定を行っている。いずれも各町1名ずつが原則だが、宮本・桜町と先達・愛宕町は、元方が2名参加する。

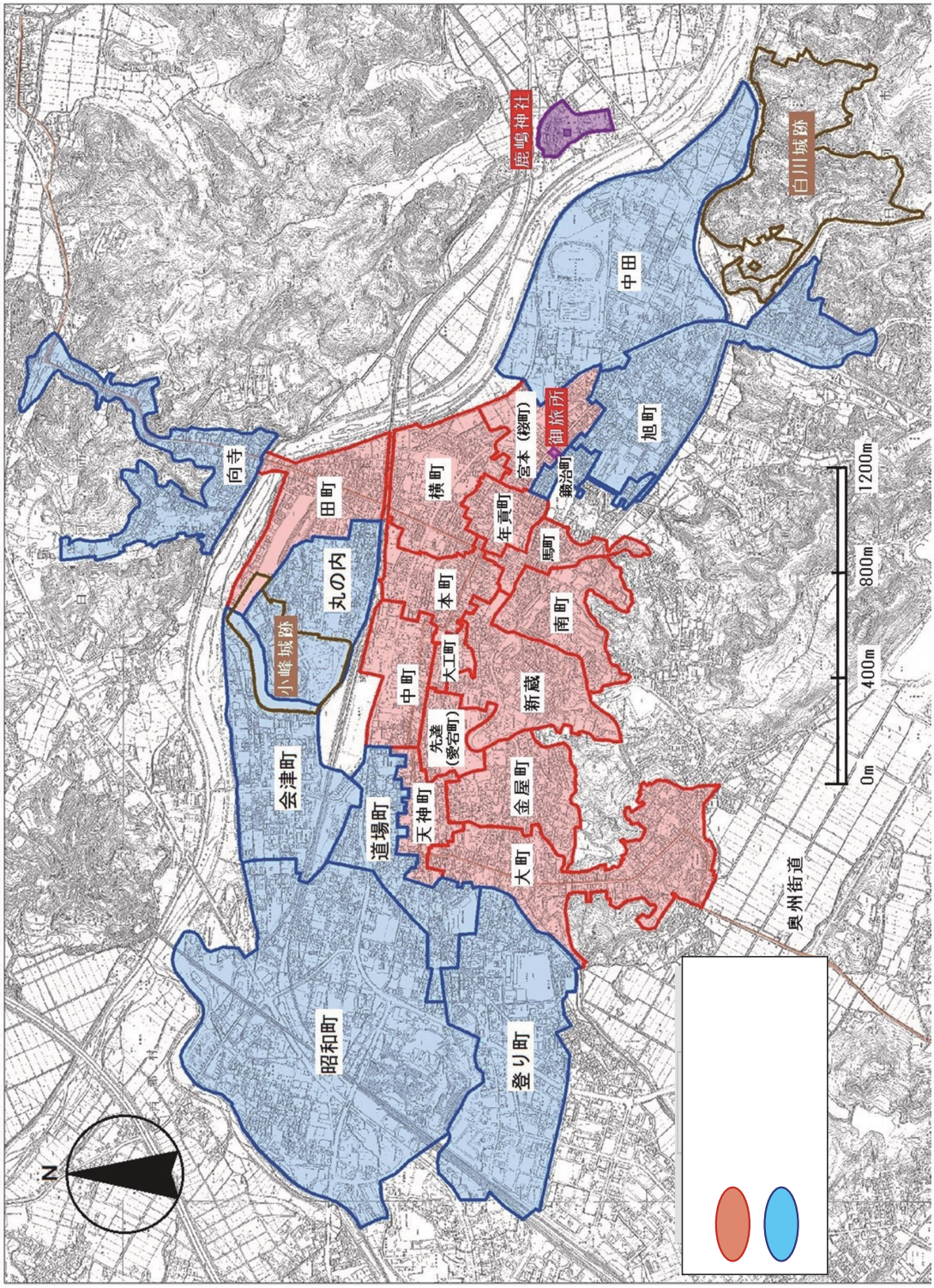
「総町参会」の決定に従い、実際に執行を行うのが年番会である。6～7の町内の総代により構成されており、常任である宮本・桜町と先達・愛宕町を除き、任期制が取られている。任期は時期によって違いがあるが、近年は2年ごとに交代している。

町内組織図の一例：桜町



祭礼組織図

鹿嶋神社祭礼（白河提灯まつり）組織範囲図



（３）祭礼行事の流れ

白河提灯まつりは、隔年の9月中旬の3日間にわたり、旧城下町を中心にした氏子町内の地域全体で行われるが、祭礼に関する準備や打ち合わせなどは、年間を通じて行われている。

①準備

祭礼の主な年間行事については、町内により違いがある。年が明け厳冬期の2月頃になると、各町の行列の先頭を歩く先達竿頭提灯（せんだつかんとうちょうちん）の竹竿に使用する10m前後の竹を山に入って伐採し、これを何日間も乾燥させる作業が各町において始められ、これが一年を通じた諸行事及び祭礼の準備作業の開始となる。竹竿は町ごとに長さや作り方も違い、各町の伝統を引き継ぎ様々な工夫がなされている。

準備や各種の打ち合わせは、町内全体のものや元方（もとかた）・壮者（そうじゃ）に分かれて行うもの、さらに年番会（ねんばんかい）や総町参会（そうまちさんかい）など各町の代表者によるものなど、それぞれの組織ごとに行われている。

屋台山車でのお囃子などの準備は、本番に向けて2ヶ月以上の練習を行う町内もあり、各町の子供たちが夏休みに入るとお囃子の太鼓練習を始める。太鼓を叩く速さやお囃子は、町ごとに特徴があり、子供たちが一生懸命に練習する姿は今も昔も変わらない。8月に入ると、23町が一斉にお囃子や先達竿頭提灯の練習を始め、町の至る所から笛と太鼓のお囃子が聞こえ、夜間の路上においては、先達竿頭提灯を持った各町の先達の練習する姿が見られる。町中が祭礼の準備一色の状況となり、白河の夏の風物詩といえる。

太鼓の練習風景

法被を着て屋外にて練習

先達竿頭提灯の練習風景

練習風景

屋台の組み立て準備

屋台の屋根組み立て準備

②1日目

祭礼1日目は、宮本(みやもと)である桜町(さくらまち)が、神社神輿を鹿嶋神社(かしまじんじゃ)より借り受けることから始まる。この日は、神社神輿が、23町の提灯送迎により神輿の休息所となる桜町の御旅所(おたびしょ)まで渡御することになる。

イ．行程

1日目の朝、各町内が境内に提灯を奉納する。

午後3時に23町の鹿嶋神社氏子総代(そうだい)と世話人が袴と羽織・袴姿で鹿嶋神社参集殿に集合し、祭礼が始まる。はじめに、「神楽」「浦安の舞」等が奉納され、御神体を神輿に遷す「遷座祭(せんざさい)」が行われ、神官から神輿が宮本である桜町の氏子に預けられる。これにあわせ、午後5時30分までに、神輿を提灯行列で迎えるため23町の氏子約5,000人以上が神社境内に宮入する。

その後、神輿の神社出発のための「発輿祭(はつよさい)」が行われ、午後6時には拍子木が高らかに響き渡る中、先達である愛宕町を先頭に23町内の提灯行列が横町(よこまち)・田町(たまち)が担ぐ神輿を中央にして随身門(ずいじんもん)をくぐり出発する。神池(かみいけ)にかかる太鼓橋を渡り、参道を出て阿武隈川(あぶくまがわ)を渡河し、桜町の御旅所に午後8時30分頃到着する。神輿が御旅所に到着後、「着輿祭(ちゃくよさい)」等の神事が行われ、神輿は御旅所に安置され、1日目は終了する。

1日目に、神輿が神社から出発する際と3日目に神社へ帰還する際、神輿は阿武隈川を

渡河する。祭礼の由来でも述べたが、中世までは神社南側に払川が流れており、この岸に神輿が遷座し、そこで禊が行われていたと考えられているが、明暦3年（1657）に祭礼が復活し、神輿渡御のルートが変更となったことより、阿武隈川を神輿が渡る必要が生じた。この渡河は神輿を担ぐ勇壮な場面として、祭礼の大きな見せ場の1つとなっている。

御旅所が置かれる桜町は、江戸時代の小峰城下の東端の町である。室町・戦国時代には、桜町から城下に入っていたと考えられている。桜町は、町人町では鹿嶋神社に1番近接した町で「宮本」と呼ばれており、祭礼において神社神輿を神社より借り受ける総責任町であり、祭礼を中心的に執り行う町である。このようなことから、桜町に鹿嶋神社の神輿の城下渡御の拠点として御旅所が置かれたものと考えられる。

1日目の神輿渡御のルート沿いである旭町には、江戸時代の切妻・平入りの建造物で、当時の格子が残る山﨑家建造物や、明治期の建築で床の間や違い棚、優れた匠の技術を施した建具等を備えた松島家蔵座敷建造物群、明治期から大正期にかけて建築、増築された会津屋建造物群が立ち並んでおり、神輿渡御と相まって城下町の風景を形成している。

祭礼1日目	
内　　容	渡御行程
提灯行列	鹿嶋神社から御旅所

時　　刻	行　　事	
	内　　容	場　　所
～朝	提灯奉納	鹿嶋神社
午後3時	総代・世話人　集合	鹿嶋神社　参集殿
	祭典執行	鹿嶋神社　社殿
午後5時	遷座祭	鹿嶋神社　社殿
	発輿祭	鹿嶋神社　社殿
午後4時～ 5時30分	23町内宮入	鹿嶋神社　境内
午後6時	出発準備	鹿嶋神社　境内
	先達出発	鹿嶋神社　境内
午後7時	神社神輿出発	鹿嶋神社　境内
午後8時30分	着輿祭	桜町　御旅所

遷座祭での鹿嶋神社神輿

鹿嶋神社遷座祭の行われる時の神前

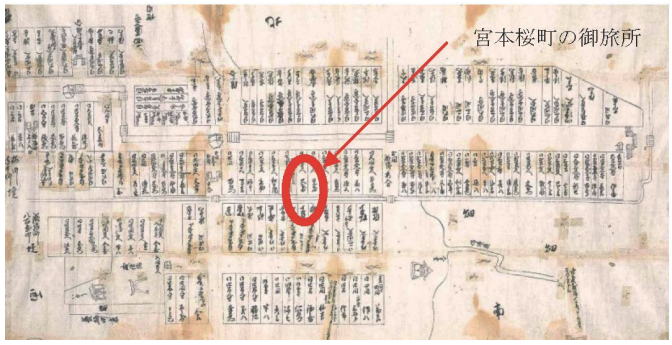
遷座祭を終えて提灯行列の出発

神社太鼓橋を渡御する神社神輿

阿武隈川を渡河する神社神輿

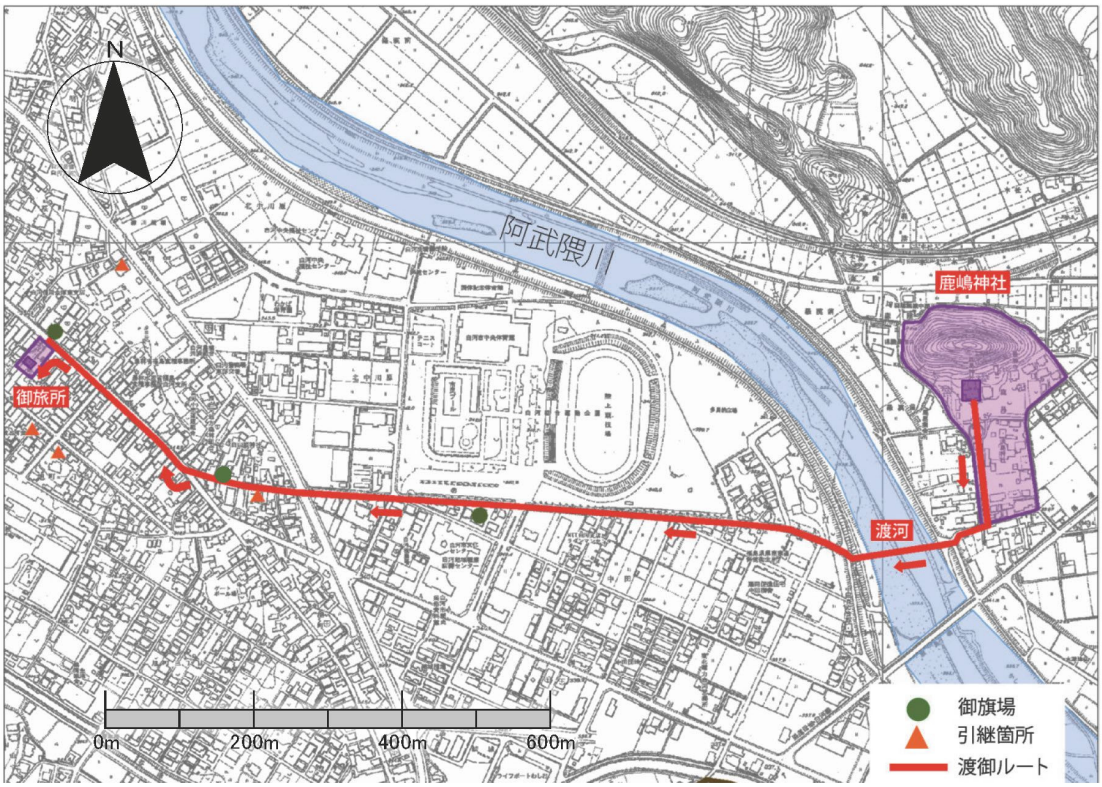
宮本・桜町に所在する御旅所

江戸時代「奥州白河城下全図」



江戸時代「桜町絵図」にみえる「御旅所」

ロ．渡御ルート



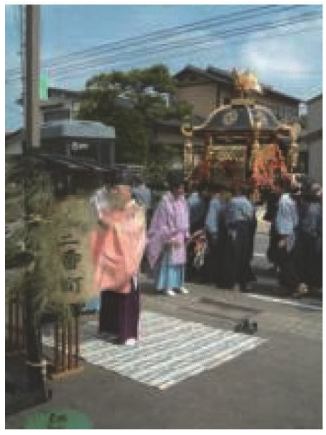
※御旗場（おはたば）および引継箇所は、全日程のいずれかの場面で神事が行われるか、引継が行われる場所を示している。

③2日目

イ．行程

祭礼2日目は、早朝より神輿の総町渡御が行われ、桜町御旅所で1泊した神輿はこの日より2日間かけて渡御する。2日目の総町渡御は、下方部の桜町・年貢町・馬町、中方部の南町・新蔵町・大工町・愛宕町（先達）、上方部の金屋町・天神町・道場町・昭和町・登り町を経て大町（九番町）までの13町内を渡御する。神輿は、各町内の氏子により供奉され、町から町へと神輿が渡御される。この際、町境にて「町内渡御引継」が行われる。この儀式は、各町へ入る前に、その町内の氏子が宮本・桜町の氏子から神輿を預けられ、町境を出る際に、神輿を宮本・桜町へと戻し、宮本・桜町の氏子が、次の町内の氏子へ引き継ぐものである。また、祭礼中、各町内には「御旗場」が設けられ、この御旗場を神輿が通過する際には、神楽奉納等の神事が執り行われる。なお、1日目の神輿は御旗場を通るものの、横町・田町の氏子だけで担いでいき、御旅所に到着するまで休憩することがないため、渡御引継は行われない。

午後3時30分頃に大町の南端にある九番町の御旗場まで渡御し、神輿は夕方までここに安置される。午後4時30分、神輿が御旅所に帰還するための神輿出発の準備が開始される。この日は神輿を供奉して担ぐ大町の氏子に宮本・桜町の氏子から神輿が引き渡される。午後5時30分、先達・愛宕町の拍子木を合図に神輿を送迎する23町内の提灯行列が御旅所に向けて出発する。大町（九番町、七番町、三番町、二番町、一番町）、天神町、中町、本町、年貢町、桜町の旧奥州街道（現在の国道294号）沿いを23町内の提灯行列に送迎されながら運行し、午後8時頃に御旅所へ到着する。1日目と同様に、神輿到着後に神事、札廻り等が行われ、安置される。


御旗場での神事

夜の総町渡御のルートは、江戸時代の奥州街道の江戸口から城下を通るルートで、沿道の天神町、中町、本町は、田町・横町と合わせて「通り五町」と呼ばれた城下の中核的な町であり、現在も多くの歴史的建造物の老舗や、町境ごとにカギ型に屈折する街路の形状がみられ、神輿運行の見せ場の一つになっている。

2日目のルート上である桜町には上の片野屋呉服店、年貢町には飯村家住宅建造物群や大崎家住宅建造物群、長田美容院建造物群、新蔵町には大野屋染物店建造物や本家富川屋染物店建造物、愛宕町にはハリストス正教会聖堂や勝軍地蔵堂、一番町（大町）には奈良屋呉服店建造物群、天神町には大木家住宅群、道場町及び道場小路には櫻井呉服店建造物群や澤野家住宅建造物群が所在している。このように、2日目の総町渡御ルートには、江戸時代後期から昭和初期に建築された商家の店や町屋、蔵などの歴史的建造物が多く立

ち並んでおり、それらを背景に人々が行き交う様子は昔から変わらず、城下町の風景を形成している。

祭礼2日目	
内　　容	渡御行程
神輿渡御	上方の町内
提灯行列	九番町から御旅所まで

時　　刻	行　　事	
	内　　容	場　　所
午前6時30分	発輿祭	桜町・御旅所
午前7時	神輿出発	桜町・御旅所
	町内渡御引継	上方の町内
午後3時30分	九番町到着	九番町
午後4時30分	出発準備	九番町
午後5時	各町集合	九番町
午後5時30分	先達出発	九番町
午後8時	着輿祭	桜町・御旅所

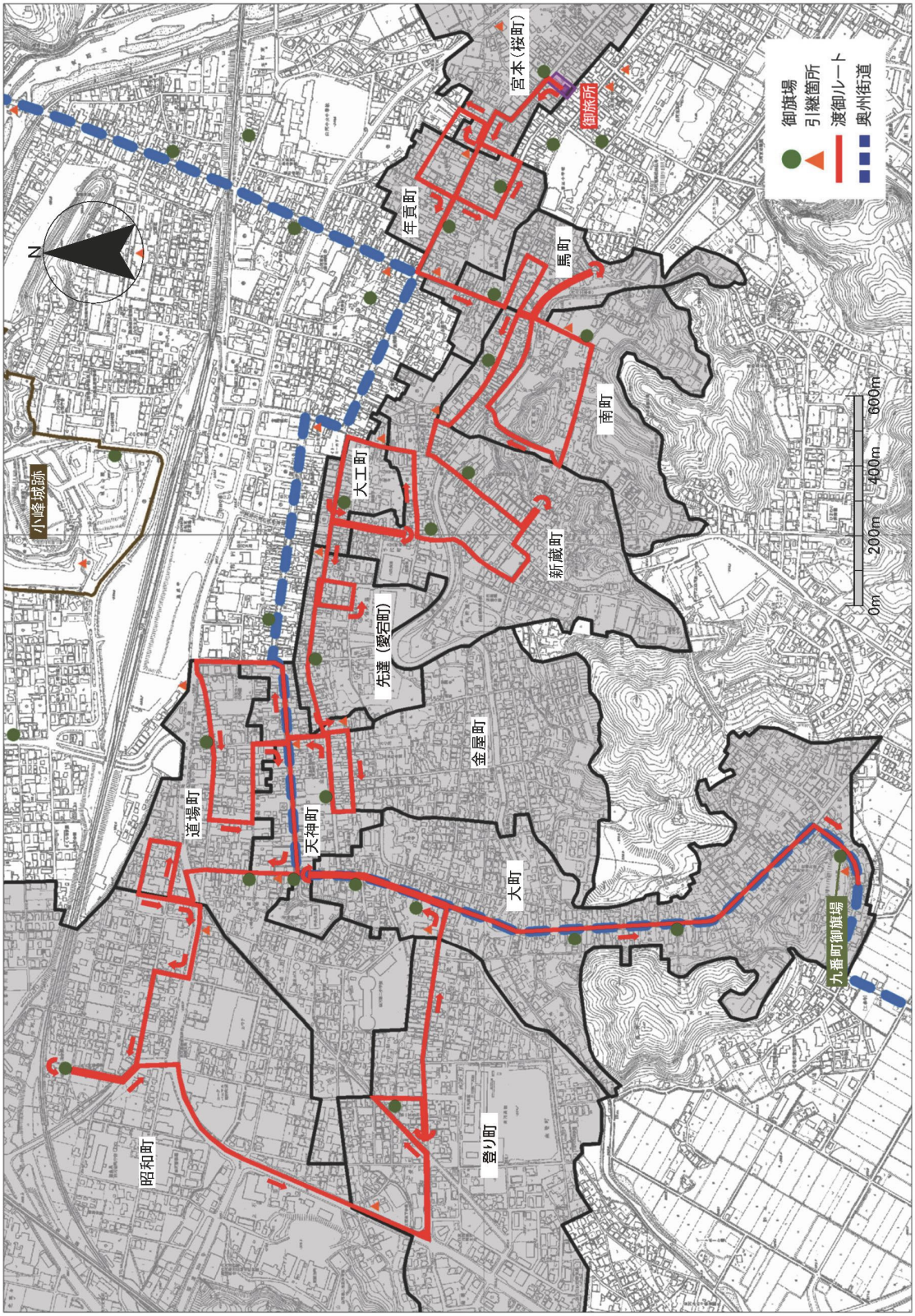
総町渡御

町内渡御引継の様子

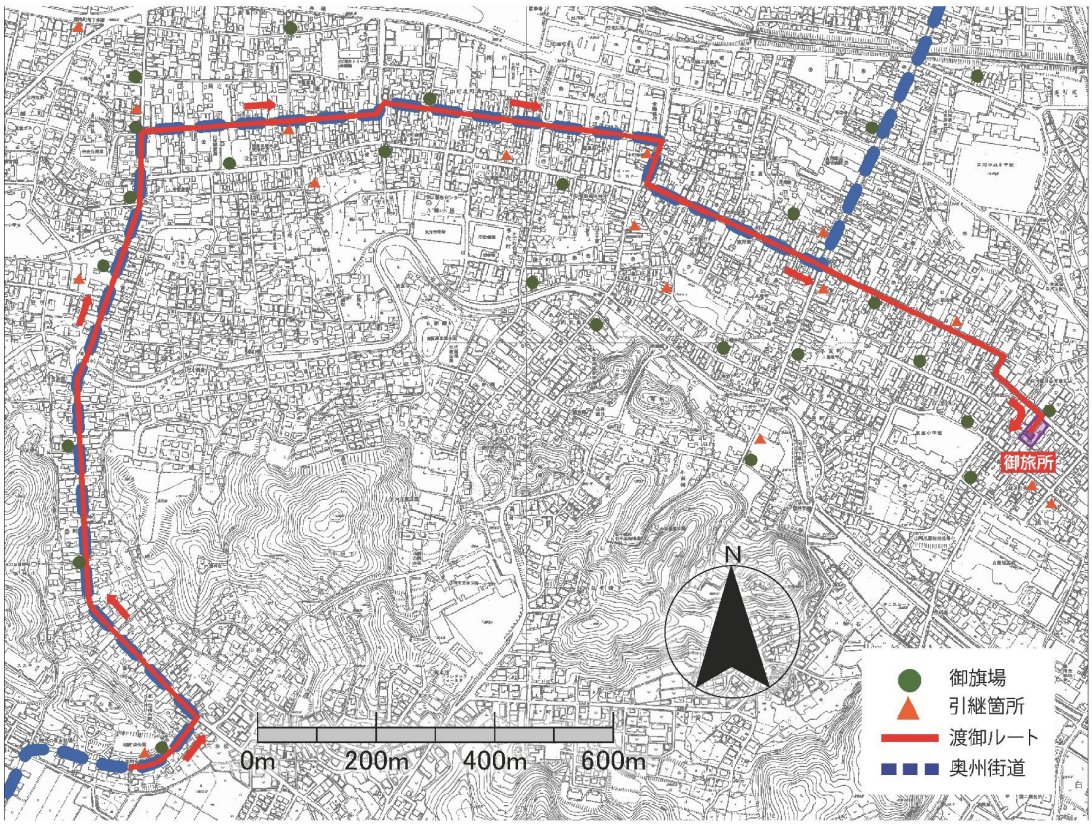
神社神輿の提灯行列

先達・高張・元方提灯行列

ロ．総町渡御ルート（昼）


御旗場
引継箇所
渡御ルート
奥州街道
0m
200m
400m
600m
N
宮本（桜町）
御旅所
年貢町
馬町
南町
新蔵町
大工町
先達（愛宕町）
金屋町
大町
天神町
道場町
昭和町
登り町
九番町御旗場
小峰城跡

総町渡御ルート（夜）



④3日目

イ．行程

祭礼3日目は、2日目と同様、早朝から桜町御旅所で神事が行われた後、総町渡御が行われる。3日目の総町渡御は、桜町御旅所のある下方部から中方部の町を巡幸する。

午前8時、神輿は御旅所を出発し、下方部の鍛冶町・旭町・中田、中方部の横町・本町・中町・会津町・丸の内・田町を経由し、夜の提灯送迎の出発地となる向寺の御旗場まで11町内を渡御する。この日も神輿は各町の氏子により供奉され、各町では御旗場にて神事が執り行われ、町境では町内渡御引継が行われる。

夜は、昼の総町渡御で向寺の御旗場まで巡幸した神輿が、旧奥州街道である向寺、横町、田町を経由し、本町四辻と呼ばれる旧奥州街道と石川街道が交差する辻から石川街道沿いの年貢町、桜町と御旅所前を通り、阿武隈川を渡河し、鹿嶋神社に帰還する。この日の神輿供奉は横町・田町の氏子が担当する。

午後5時頃、前日の夜と同様に先達・愛宕町の拍子木を合図に23町内による神社神輿の送迎の提灯行列が出発する。鹿嶋神社へ到着すると、横町・田町から宮本・桜町に神輿が引き渡され、さらに宮本から鹿嶋神社神官へ神輿の返還が行われる。

この後、神輿が無事に帰還したことを報告する「遷座祭」、御神体を神社本殿に安置する「安置式」の神事等が行われる。23町内全町が神社に到着すると、各町において札廻りが始まり、宮本により「全町お手打ち」の儀式が行われ、3日間の祭礼が幕を閉じる。

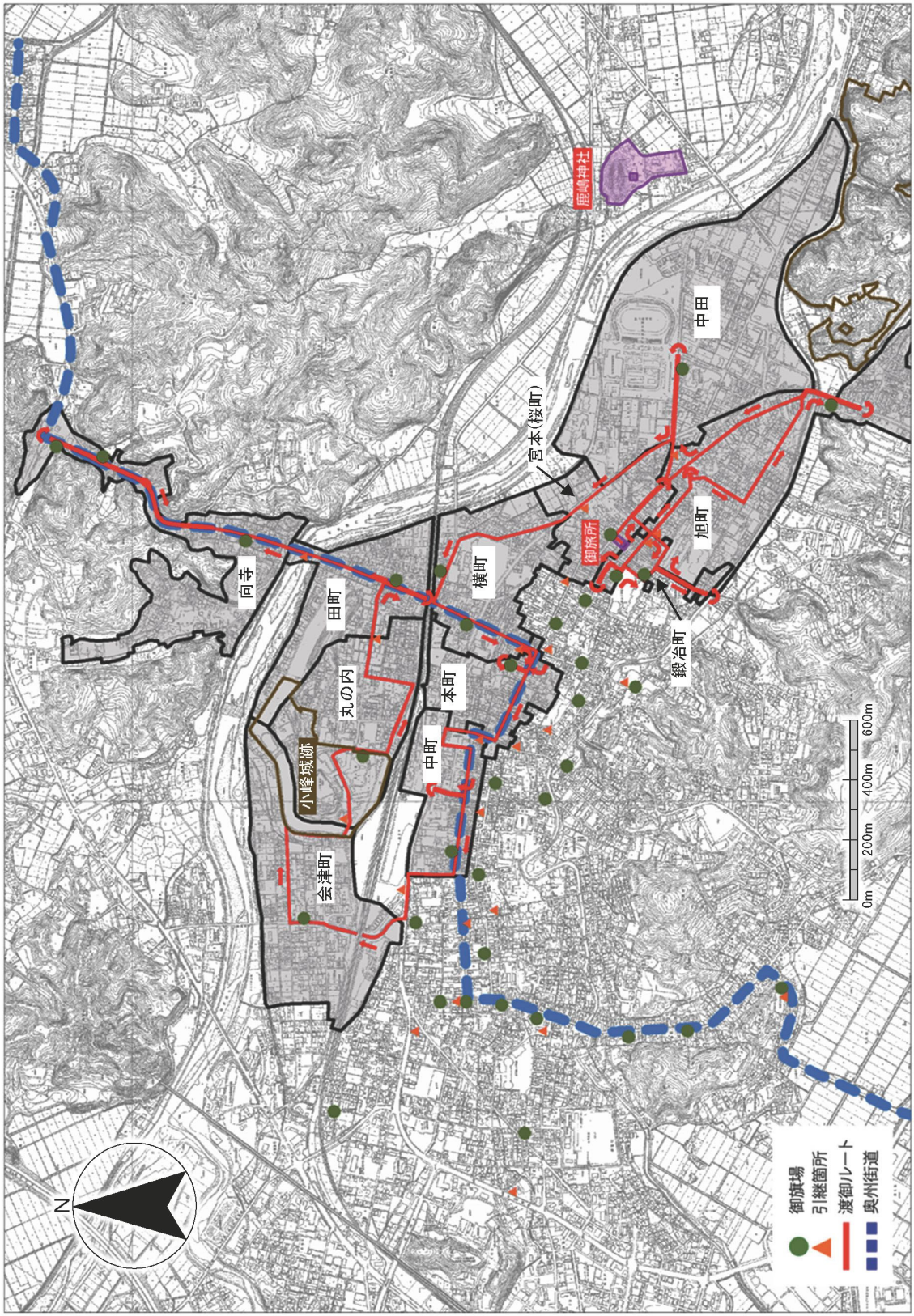
2日目夜は旧城下南端・江戸方面からの城下入口から旧奥州街道を通り、城下東端の宮本・桜町まで渡御するルートであったが、3日目夜は、旧城下北端・仙台方面の城下入口から旧奥州街道を通り、城下東端を経由し、鹿嶋神社まで渡御するルートであり、この2日間で旧城下の主要道路を全て通ることになり、旧城下の表通りを紹介するかのような運行ルートとなる。町の人々は、裏町や横丁からこの表通りに集まり、提灯行列を観覧する。約350年変わらぬ祭礼の見物方法である。

3日目の総町渡御ルートとなる本町には旧脇本陣柳屋旅館蔵座敷、遠藤家住宅、根本家住宅、旧神歯科医院、中町には旧商工会議所建造物、横町には河和家住宅、丸の内（郭内）には、史跡小峰城跡、旧小峰城太鼓櫓、旧荒井家「楽山荘」、田町には旧明治政府指定米倉庫、真田家蔵座敷が所在しており、それらを背景に人々が行き交う様子とそれらを見物する人々は昔から変わらず、城下町の風景を形成している。

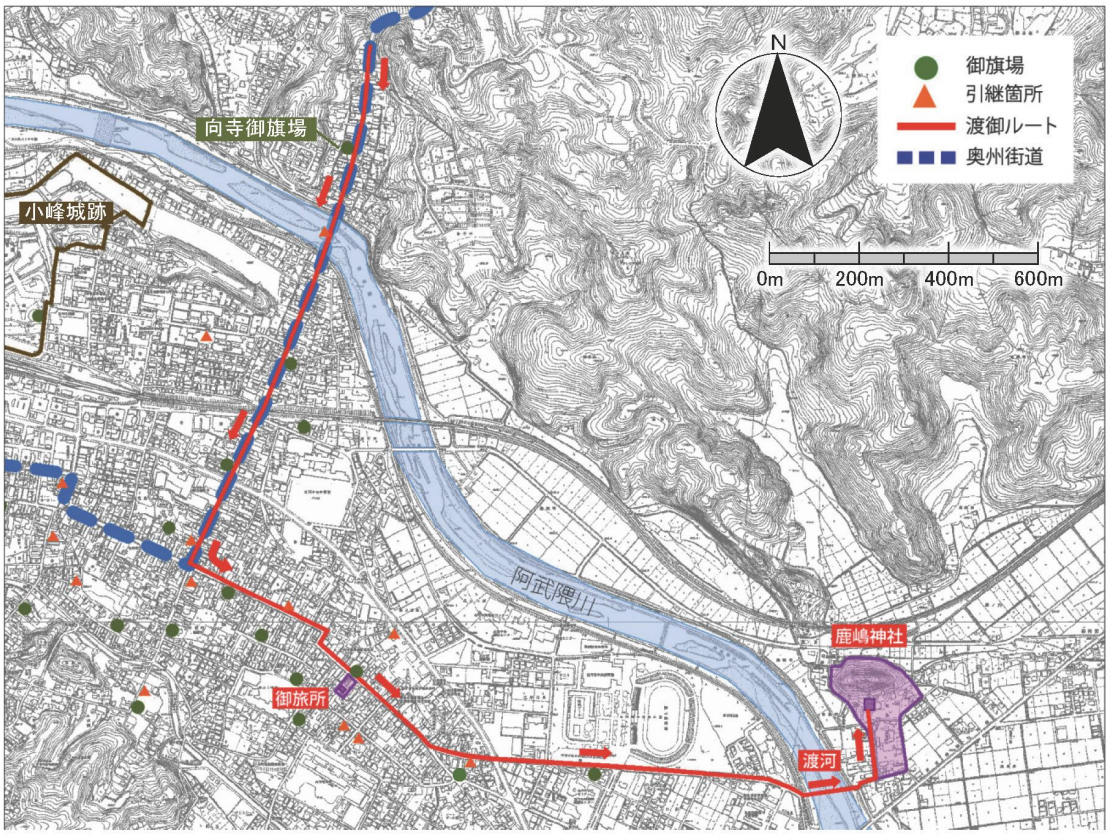
祭礼3日目	
内　　容	渡御行程
神輿渡御	下方の町内
提灯行列	向寺から鹿嶋神社まで

時　　刻	行　　事	
	内　　容	場　　所
午前7時	発輿祭	桜町・御旅所
午前7時30分	神輿出発	桜町・御旅所
	町内渡御引継	上方の町内
午後4時	向寺到着	向寺
午後4時30分	各町集合	向寺
午後5時	先達出発	向寺
午後8時30分	遷座祭	鹿嶋神社
	安置の式	鹿嶋神社
	全町お手打ち	鹿嶋神社

ロ．総町渡御ルート（昼）


N
向寺
田町
丸の内
小峰城跡
会津町
中町
本町
横町
宮本(桜町)
御旅所
鹿島神社
鍛冶町
旭町
中田
0m
200m
400m
600m
御旗場
引継箇所
渡御ルート
奥州街道

総町渡御ルート（夜）



神社神輿の前を歩く神職

提灯行列の中の神社神輿

阿武隈川を渡る高張提灯

阿武隈川を渡河して神社へ帰還する神輿

⑤屋台・山車の巡行

白河提灯まつりでは、昼間の神輿の総町渡御と夜の神輿送迎の提灯行列とともに、山車と屋台の引き回しが主たる行事となっている。祭礼期間中の日中には、旧奥州街道を中心として23町内の屋台・山車の引き回しが行われ、町中が屋台・山車であふれる。神事に付随する、いわゆる「付け祭」であり、城下町の環境と人々の生活の移り変わりに合わせて変化しながら、今日まで伝承されてきた。

江戸時代には、屋台・山車の数が制限されたり、屋台の舞台で芸をする人の数が制限されたりすることが多かったが、明治期以降はすべての町内において屋台・山車の引き回しや踊り芸などが盛んに行われるようになった。明治期の本町の祭礼記録によれば、明治3年（1870）には「各町全部山車を出したるなり、久しぶりに大祭となりたるなり」と記されており、それ以降は各町で屋台・山車を出すようになっている。同記録によれば、本町は「花屋台」あるいは「踊り屋台」と呼ばれた屋台を出す役割を担う町内であった。このような役割は主に城下町の中核となっていた通り五町（天神町、中町、本町、横町、田町）の町内が担っていた。

屋台以外の氏子町内については、戦後までは山車を引き回すという役割分担であったが、現在の祭礼では屋台と山車を明確に区分せず、祭礼の3日間のうち2日目と3日目の昼に、23町内の屋台・山車が市街地を舞台に引き回されている。

イ　各町の屋台・山車

各町の屋台・山車の中でも、江戸時代の町人町であった先達・愛宕町、大工町、新蔵町、本町、横町、田町、中町、金屋町、天神町などは、江戸時代や明治期に製作された屋台形式のもので、屋根飾りの彫刻等の意匠には伝統的な装飾がみられる。一方、南町、年貢町、宮本・桜町のものは、伝統的な山車形式のものである。これらの屋台・山車は、祭礼の準備が始まる前に組み立てが行われ、祭礼が終わると解体され、各町内ごとに保管される。

また、各町内が用いる提灯もそれぞれ異なり、それぞれの町印をもとにしたデザインが用いられている。

なお、屋台・山車を引き回す際には、各町の屋台・山車の飾り物をお囃子の数え歌にしたものが、現在も町ごとにアレンジされながら歌われ続けている。

一ツとや一ァア	一番先達愛宕町	エイエイ	鶴の御紋に立烏帽子	エイエイ
二ツとや　〃	二番に引出す大工町	〃	兎の餅つきおめでたい	〃
三ツとや　〃	三番（組）盃金屋町	〃	一杯おあがりおめでたい	〃
四ツとや　〃	四町五町の大町よ	〃	猩々の御顔は桜色	〃
五ツとや　〃	いつも変らぬ中町よ	〃	すすきお月様おめでたい	〃
六ツとや　〃	無理に引出す年貢町	〃	トキもつくらぬ鶏を	〃

七ツとや　〃　何もしらない南町　〃　から袋しよい出した大黒よ　〃
八ツとや　〃　やたらに気をもむ横田町　〃　評判ばかりでよくもない　〃
九ツとや　〃　こごみすぎたる鐘馗様　〃　はなぐろ剣士でおめでたい　〃
十　とや　〃　とうと鐘馗をやめにして〃　武（竹）の内とはおめでたい　〃
十一とや　〃　十一番引出す本町よ　〃　本町ばかりは花屋台　〃

中町屋台山車

本町屋台山車

金屋町屋台山車

天神町屋台山車

ロ．屋台・山車と提灯一覧

町　名	屋　台　・　山　車	提　灯
先達（愛宕町）		
大工町		
新蔵町		
本町		
南町		
横町		
田町		
年貢町		
馬町		
大町		
中町		
金屋町		

町　名	屋　台　・　山　車	提　灯
天神町		
昭和町		
向寺		
鍛冶町		
道場町		
丸の内		
登り町		
会津町		
旭町		
中田		
宮本（桜町）		

４．まとめ

提灯まつりの開催年の夏休みの後半になると、町の至る所から子供たちが練習のため演奏する笛や太鼓の音が聞こえてくる。夜になれば空き地や路上では、長い竹竿の上に町印の入った提灯を持った隊列が「ワッショ　オッセ　ワッショ　オッセ」「ワッショイ　ワッショイ」などの掛け声のもと、練習する風景も見かけるようになる。また、各町の町印の入った半纏姿で歩く氏子の姿が町のあちこちで見かけられ、町中が「白河提灯まつり」の準備一色の光景となる。

祭礼期間になると、町の旦那衆などは商売や仕事を休み、まつりに熱中する。通りの至る所で各町の屋台・山車がすれ違い、町中は混雑する。夜になるとたくさんの灯が雲のようになった壮観な景観が町全体をおおい尽くす。明治期のエドワード・モースが見た提灯まつりの光景が今も見られるのである。

これらの光景は、約350年という長い年月にわたり、白河の町の人々によって守り伝えられてきた重要な伝統文化と、蔵や商家等の歴史的建造物が多く残る城下の町並みが相まって本市の良好な歴史的風致を形成している。